

〈論文〉

文学的プラント・ハンティングの試み
—「世界の文学」の授業についてのケース・スタディ—

田中恒寿

はじめに

2020年度の「世界の文学」(札幌大学地域共創学群リベラルアーツ専攻および現代教養専攻専門科目, 3・4年次配当, 2単位)では, 文学的プラント・ハンティングを試みた。文学的プラント・ハンティングとは, 文学作品内でおこなう植物探しである。受講生には実際にこのプラント・ハンティングを行ってもらった。筆者にとっても初めての経験であり, ここにケース・スタディを行う。

そもそも植物は, 文学作品にも比較的頻繁に登場してくる生物種である。重要な意味を付して描かれる場合も少なくない。文学を鑑賞する側に立ってみれば, 植物は軽視できないコノテーションを担った要素であると言える。その植物に焦点を当てて文学作品を讀んでいこうというのが基本的な出発点だ。

受講生は, かならずしも文学愛好者ばかりとは限らない。むしろそうでない場合の方が多いくらいだろう。文学をどう読めばいいのか戸惑う人も少なくない。そこで植物探しにフォーカスすると, 余計なことに気を回すことなく, とにかく読み進めなくてはならなくなるので, アメなカムチなのかは別として, 読書の推進力になることは間違いないだろう。取り上げる作品もこちらから押し付けるわけではなく, 各自が自分の読みたい作品を自由に選べるようにし, 受講生がみずから文学を体験する機会を提供することを重視した。

有川浩『植物図鑑』は, 筆者が文学的プラント・ハンティングを思いつききっかけとなった作品である。植物写真家をめぐる恋愛小説であるが, 山菜料理のレシピ本のような要素も随所に盛り込まれている。単行本だと表と裏の扉に, 文庫本だと口絵に, 作品の中に登場してくる主要な植物の写真33点が掲載されていて, 便利なことこの上ない。スカシタゴボウやハゼランなど, なじみの薄い植物の場合, 図鑑やインターネットで検索する手間が省けるのである。タイトルの植物図鑑にひっかけて, それらしい部分を作って見せた遊び心だろうが, すべての文学書がこのような作りになっていたら, どれほど読者の利便性

が増すことだろうか。

文学にはかなりの頻度で植物が描かれる。既知の植物なら問題はないが、知らない植物の場合、やはり写真ぐらいは一度見ておかないと、イメージを膨らませることができない。将来書籍のデジタル化が進むと、リンクを貼って画像に飛べるような仕組みも可能になるのかもしれないが、現時点で『植物図鑑』の本の作りは理想的だと評価できる¹⁾。ただ、この授業では植物の視覚化には手を触れなかった。

もうひとつ、翻訳文学の場合は、植物名が正確に訳されているかどうかという点も問題となりうる。植物が作品の理解・鑑賞に大きな役割を果たしているにもかかわらず、翻訳が間違っていたのでは元も子もなくなってしまふ。それなのに、現実問題として、誤訳はかなりの頻度で現れてくるのだ。もちろん、これは植物に限った問題ではなく、どの生物種にも当てはまることだが、哺乳類はそもそも種の数が少ないので、翻訳にあたっては調べが付きやすい。他方、昆虫の多様性は植物を凌駕するが、幸か不幸か、『ファーブル昆虫記』のような稀有な例を除いて、文学的生態系の中で昆虫の占めるニッチは小さい。

誤訳が生じる原因として、地域差（彼の地には一般的でも、日本には自生しないなど）によるもの、俗称のあいまいさに由来するもの、分類が細かくて特定しづらいことによるものなど、いくつかあるが、植物に対する訳者の関心の薄さに起因するものも少なくない。同一作品の同一植物名が、翻訳では、登場する箇所によって別の訳語があてられていたりするケースも、さほど珍しいことではない。

誤訳はもちろん、鑑賞するうえで正確なイメージを妨げることになるうえ、そこからいかに精緻な分析・考察を展開したところで、出発点がそもそも違っていたのでは、結論が正しいはずがない。ただ、話がやや専門的に傾くきらいがあるため、この授業においては、翻訳の妥当性をいちいち追求することはしていない。こちらが典型的な例に気がついた場合、補足的に指摘するにとどめた。

第1章 事例の紹介

受講生は各々取り組むべき作品を自由に選べるものとした。ただし、重複を避けるため、早い者勝ちで、あらかじめ作品を登録してもらった。今年度の特殊事情として、新型コロナウイルスの影響を見逃すわけにはいかない。授業は通常の対面式ではなく、Teamsをつかった遠隔授業で展開される。春学期の授業開始はゴールデンウィークが明けてからにずれ込んだ。非常事態宣言が発出されたため、札幌大学の図書館は利用できても、地域の図書館は利用できない。このような状況下では、受講生が読むべき本を手に入れるのにもそれなりの困難が予想されたため、「世界の文学」を文字通りに解釈して、日本の文学も

対象として含めることにした²⁾。日本文学まで対象を広げれば、自宅に1冊や2冊の文学作品はあるだろうという想定である。それでも無理なら買ってもらうしかないが、この点に関して、受講生からのクレームはなかった。結果として、日本のヤングアダルト作品も数冊リストアップされ、筆者にとっては思いもよらぬ世界が広がったことは僥倖と言える。

ジャンルとしては詩、戯曲、小説という主要なジャンルに限定し、随筆、ルポルタージュ、自伝等、その他のジャンルは登録不可とした。これは、あくまでメジャーな作品に取り組んでもらいたいという配慮によるものである。国別にまとめた選書の傾向を以下に示す。*印は採集シート（書誌情報、植物名、ページ数、前後を含めた引用などを記載する独自のフォーマット）が提出された作品を意味している。

(諸外国)

*ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』（英）

*『鏡の国のアリス』（英）

スタインベック『ハツカネズミと人間』（英）

ローリング『ハリー・ポッターと賢者の石』（英）

D.H. ロレンス『息子と恋人』（英）

*ウィリアム・シェイクスピア『オセロー』（英）

『ハムレット』（英）

*『ロミオとジュリエット』（英）

ジェイムス・P・ホーガン『星を継ぐ者』（英）

*デボラ・インストール『ロボットイン・ザ・ガーデン』（英）

* C.S. ルイス『ナルニア国物語』（英）

*スウィフト『ガリバー旅行記』（英）

*ゴールズワージー『林檎の樹』（英）

*スティーブンソン『ジークル博士とハイド氏』（英）

ジェーン・オースティン『自負と偏見』（英）

フォースター『モーリス』（英）

*アガサ・クリスティー『黄色いアイリス』（英）

*マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』（米）

レオ・レオーニ『平行植物』（米）

*サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』（米）

*『フラニーとゾーイー』（米）

- スーザン・テリス『キルト ある少女の物語』（米）
- ウォルト・ホイットマン『草の葉』（米）
- ウラジーミル・ナボコフ『ロリータ』（米）
- ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム！』（米）
- *ヴァネッサ・ディフェンバー『花言葉をさがして』（米）
- *エレナ・ポーター『少女ポリアンナ』（米）
- メルビル『白鯨』（米）
- *ガルシン『赤い花』（露）
- *ツルゲーネフ『初恋』（露）
- ドストエフスキー『罪と罰』（露）
- *アントン・チェーホフの『桜の園・三姉妹』（露）
- ゲーテ『ファウスト』（独）
- トーマス・マン『魔の山』（独）
- *ガルシア＝マルケス『エレンディラ』（コロンビア）
- ガルシア・マルケス『コレラの時代の愛』（コロンビア）
- *メアリー・フランシス・コーディ『旅路の果て モンゴメリーの庭で』（カナダ）
- モンゴメリー『赤毛のアン』（カナダ）
- *パオロ・コニエッティ『帰れない山』（伊）
- ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』（伊）
- *ジェイムズ・ステューヴンズ『小人たちの黄金』（アイルランド）
- アストリッド・リンドグレーン『長くつ下のピッピ』（スウェーデン）
- アンデルセン『アンデルセン童話集』（デンマーク）
- サーディ『果樹園』（イラン）
- ジョアン・ギマランエス・ローザ『大いなる奥地』（ブラジル）
- *『アラジンと魔法のランプ』（アラビア）
- オマル・カベサス『山は果てしなき緑の草原ではなく』（ニカラグア）
- *アジジ・ハジ・アブドゥラー『山の麓の老人』（マレーシア）
- (以下、日本)
- 神永学『怪盗探偵山猫 虚像のウロボロス』
- 神永学『怪盗探偵山猫 鼠たちの宴』
- 神永学『怪盗探偵山猫 黒羊の挽歌』
- 神永学『怪盗探偵山猫 月下の三猿』

川端康成『山の音』

* 梶井基次郎『檸檬』

藤原定家選『小倉百人一首』

* 村上龍『コインロッカーベイビーズ』

* 『悲しき熱帯』

* 有川浩『植物図鑑』

* 松久淳・田中渉『ラブコメ』

豊島ミホ『花が咲く頃いた君と』

* 住野よる『また、同じ夢を見ていた』

神埜明美『高台家の人々』

* 芥川龍之介『羅生門・鼻・芋粥』

* よしもとばなな『サウスポイント』

* 伊坂幸太郎『火星に住むつもりかい？』

* 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』

堀田あけみ『われも恋う』

* 湯本香樹実『夏の庭』

* 村上春樹『ノルウェイの森』

宮部みゆき『ここはボツコニアン』

松尾芭蕉『奥の細道』

* 村山由佳『はつ恋』

* 夏目漱石『吾輩は猫である』

* 宮本輝『草花たちの静かな誓い』

『竹取物語』

* 小鳥居ほたる『記憶喪失の君と、君だけを忘れてしまった僕。』

* うたたP・鳥居羊『こちら、幸福安心委員会です。女王様と永遠に幸せな死刑囚』

* 『こちら、幸福安心委員会です。女王様とハピネス・サマーゲーム』

* 『こちら、幸福安心委員会です。女王様と世界線上カラミティ』

三島有紀子『ぶどうのなみだ』

* 宮木あや子『白蝶花』

* 湊かなえ『花の鎖』

以上が、登録作品のリストである。登録はしたものの、植物が見つからなかったという

ケースもあるだろうし、何らかの理由であきらめたのか、採集を放棄されたものも多い。そういった作品の中には、ある程度ページをめくってみればいくつかの植物を発見できそうなものも含まれているので、科目履修そのものに興味を失ったということだろうか。

内訳をみると、外国文学作品48に対して日本文学作品が34。日本以外で最も多いのはイギリスだった。多岐にわたるラインナップで興味深かったが、結局採集シートが提出された作品の中で、筆者にとって未知のもの、意外性の高いものは日本文学に多かった。

タイトルに花や植物が含まれるなど、プラント・ハンティングを強く意識した選び方をする受講生がいるのは当然だが、古典的名作に取り組む者も相当数あった。

有効とする植物の範囲に関しては、受講生からの指摘もあって、生物5界説にもとづく植物界を採集の対象とした。したがってシダ植物やコケ植物、紅藻、褐藻のたぐいも含まれる。ただ、文学に登場するものに限って言えば、これは植物なのか否か、判断に迷うといった事例は皆無である。

厄介なのは、いろんな形をとって植物が登場する点にある。この授業では、植物が空間の装飾として登場してくるケースを重視した。花は多くの場合、風景や室内空間の彩りとしてさまざまな意味を付与されながら文学作品中に織り込まれていく。一方、穀物や野菜の多くは単純に食べ物として描かれ、装飾的な意味合いが少ない。また、籐の籠やクルミのテーブルなど、材料として加工されている場合も、もともとの植物体が持っているイメージ喚起力が極端に薄まるケースが多い。これは解釈の多様性をもたらしにくいことを意味している。そのため、最初の約束事として、食べ物や加工製品はハンティングの対象外とした。ただ、植物から読み取れる意味についての考察は、最も興味深い点ではあるが、作品全体ないし、場合によっては当該作家の他の作品との関連性への目配り等も必要になってくるため難易度が高く、受講生が取り組むべき必須の課題とはせず、特徴的な例を指摘するにとどめた。

最も多い類型は、空間描写の一要素として植物が描かれる場合である。こうしたケースでは、植物にさほど重要な意味が付与されていないこともしばしばである。考察を義務づけることで、かえって無益な深読みやこじつけを誘発してしまう恐れもある。また、こちらも既読の作品であればまだしも、未読の作品を受講生が取り上げた場合、受講生が提示する考察に対して適切な判断を下すことができないという現実的制約もある。授業期間中にはできなかったコメントを次章で紹介する。

第2章 植物が重要な意味を担って登場するいくつかの作品の紹介

はじめに、住野よる『また、同じ夢を見ていた』を取り上げる。住野よるは『君の隣臓をたべたい』（2015年）でデビューし、『また、同じ夢を見ていた』は2作目にあたる。おそらくこの著者は花にあまり興味がない。桐生くん（ヒロイン奈ノ花のクラスメート）にもらった「一枚の素敵な絵」のことが出てくるが、「一輪の花」とあるだけで、何の花かは特定されていない。しかし、物語の大事な転換点で印象的なオジギソウの比喩が登場する。少し長くなるが、88ページから89ページにかけての部分を用いてみよう。

「じゃあ、どうしていつも私との約束より仕事を優先するの？ 今回もそう。出張だから、授業参観に来られなくなったって」

「え」

私が言い終わると、南さんが何かを言いかけたのはほぼ同時でした。正面から強い風が一度吹きました。突然の風に、私は目を瞑ってしまいます。

やがて風が私の長い髪を弄ぶのをやめ、私はゆっくりとまぶたを開いて、もう一度南さんの方を見ました。

たった数秒。風が奪ったのは、たった数秒だったはずです。

だから、そんな短い時間で何が起こったのか、すぐにはわかりませんでした。

「南、さん？」

まるで、それは触ったら縮んでしまうオジギソウみたいでした。

南さんの顔から、口元から、さっきまでの笑顔が完全に消え去っていました。

前触れのない南さんの変化に、私は驚きます。

「どうか、したの？」

私がきちんと訊いたのに、南さんは、答えてくれませんでした。ただ、無言で首をふるふると横に振るだけ。何でもない、そういいたかったのでしょうか。でも、それが何でもないことくらい、子どもにでもわかりました。

「ねえ、南さん？」

「おい、奈ノ花」

南さんの声は震えていました。震える声で、私の名前を呼びました。南さんから、ガキ、以外の呼ばれ方をされたのは初めてで、私はおかしい感じがしました。

ここに登場するオジギソウの比喩も、ある意味、ステレオタイプなものだ。ただし、南さん（小説を書く高校生）の態度が劇的に変化するこのシーンは、いわば作品のキーボー

ントで、物語の展開にも合致した鮮やかなイメージを現前させている。オジギソウの葉は、触っても縮むわけではない。真ん中で折り合わさるだけだ。折り合わされ、閉じてしまったのは南さんの心だろうか。ありえるはずのないことが目の前で起こっていることに気付いた南さんの心は凍りつき、内向する。しかし、さらに踏み込んで解釈すると、折り合わさったオジギソウの葉の左右は、それぞれ「私」（奈ノ花）と南さんを象徴しているのかもしれない。「私」にはまだ理解が及んでいないが、南さんは二人が一人、葉脈でつながった一枚の葉っぱだと悟ってしまった。オジギソウの比喩の前に描きこまれた風——この作品では、大事な場面で吹いてくる——の描写も、この表現を引き立てるのに一役買っているといえるだろう。

次に取り上げるのは宮本輝『草花たちの静かな誓い』だ。叔母のキクエ・オルcottが亡くなって、遺産相続をすることになった甥の小畑弦矢（主人公）が、カリフォルニアにある叔母の家へ整理のためにやって来るところから物語は始まる。桜の終わった伊豆から、ジャカラダの咲きはじめたカリフォルニアへ、花を小道具にあしらった場面転換である。キクエの家はあきれほどの豪邸で、九百坪を越える中庭も、庭師のおかげで手入れが行き届いている。読者がかすかに違和感を覚えるのは、大量に吊り下げられた植木鉢ではないだろうか。

小説の後半、このハンギング・ポットに重要な意味があることがわかってくる。とくに問題となるガーベラが初めて登場してくるのは39ページだが、ここではまだ庭植えの多くの花の一つとしてさりげなく列挙されているにすぎない。だが、物語が終盤にさしかかるあたりで、重要な情報が明らかにされる。265ページから267ページにかけての部分をかいつまんで引用してみよう。

「ガーベラはねえ、全部ここに吊るすことになってるんですよ。キクエが日本から帰る前に戻しておくつもりだったんです」

と言って、ダニー〔庭師〕は弦矢が出したカフェラテの容器を受け取り、西側の蔓バラの棚を指差した。

あそこへ行ってみると促しているのだとわかって、弦矢は階段を降りて中庭に出ると海のほうへと歩いて行った。

振り返ると、ベランダの手すりすべてがガーベラで覆われて、濃いピンクや白の、菊に似た花卉が海からの風になびいていた。

温暖な気候のせいなのか、日本のガーベラよりもはるかに花は大きかった。

「キクエの部屋からみるのがいちばんきれいなんですよ」

(中略)

レイラ [弦矢の姪] も三十三歳。ガーベラの鉢植えも三十三鉢。弦矢のなかでは、これはこじつけでもなければ偶然でもないという確信が生まれていた。

ガーベラは行方不明になった娘を偲ぶための象徴として、キクエにより丹精込めて育てられたものだった。この小説は、総じて花や庭園の描写が多いが、それはキクエのガーベラにこめた秘めたる思いを唐突なものに感じさせないための工夫だろうか。物語は桜の散った日本に端を発して、ジャカラダのつぼみが膨らむカリフォルニアへと飛び、ジャカラダの花が色を失うところに結末を迎える。最後は日米のノウゼンカズラ二種を梔子にして再び日本へと思いを馳せ、幕を閉じた。

最後に取り上げる湊かなえ『花の鎖』は、期待にたがわず、コスモス、コマクサ、リンドウといった花が一見バラバラな三つのエピソードをつないでいく。

物語は、美雪、紗月、梨花の三人をそれぞれヒロインとするエピソードが章ごとに展開していく。トリプル・カットバックとでもいうべき手法だ。もちろん、はじめのうちは、相互の関係がつかめないため、迷走感は否めない。老舗の和菓子屋梅香堂やアカシア商店街といった共通する舞台装置がほのかに統一感をかもし出すにすぎない。

花は始めから終わりまで頻繁に登場する。とくに目に付くのはコスモスだ。76 ページの例を挙げておこう。

うれしくて、やはりぺこりと頭を下げると、庭に咲いたコスモスが目に留まりました。

「きれいですね、コスモス」

つい言ってしまっただけなのに、森山さんは「どうぞ、持って帰ってください」と家の中からはさみと新聞紙を取ってきて、片腕で抱えきれないくらいの束を持たせてくれました。

コスモスがしっかり描かれるのは美雪に関するエピソードにおいてだが、その残響は梨花のエピソードにおいても繰り返される。一例を 198 ページから 199 ページにかけての引用で示そう。

玄関を出たところでおばさんは中へ戻り、はさみと新聞を持ってきた。庭のコスモ

スを手早く切り取り、片手で抱えきれないほど大きな束を新聞紙で包み、あたしに差し出してくれる。

「よかったら、家に飾って」

この手際よさは、訪れた人にみんなそうしているのだろう。ありがたく受け取り、門を出た。

白、薄紫、濃い紫、三色のコスモス。近頃、コスモスづいている。幼稚園の参観日、祖母の病室で専務から受け取ったのも、同じ色の組み合わせだ。

このように、コスモスが美雪と梨花をつなぐ鎖だとすれば、リンドウは美雪と紗月をつなぐ鎖と言えるだろう。美雪は夫の和弥が人生の転機に買ってきたリンドウを思い出の中に大事にしまう。そして紗月もまた、リンドウに託して、人生の節目となる大きな決断をした。266 ページから 267 ページにかけての部分を用いる。

左手に握った青いりんどうの花束を母に差し出す。

「お母さんに相談したい話があるの」

そう言い添えて。(中略)

「相談じゃなくて、もう、さっちゃんは決めているでしょ」

「どうして？」

「だって、花を買ってきているんだもの。お父さんと同じ。だから、さっちゃんの決めたことは間違っていないはずよ。」

一方、「本格的な登山として初めて八ヶ岳を縦走したときに見たコマクサの美しさに震えた。限りなく紫に近いピンク色はまさに高山植物の女王という風格が漂っていて、あの色を再現できないかと試みたのが描き始めたきっかけだ」(p.34)とあるように、紗月に関係する重要な花はコマクサだ。

そして、一世一代の決断をするために、再び思い出のコマクサに会うため、前田と二人、八ヶ岳を目指す。しかし、九月の終わりではコマクサの時期としては遅すぎる。自信ありげな前田が案内したのは、なんと、以前紗月が描いたコマクサの絵が飾ってある山小屋だった。自分の絵と再会した紗月は、父親を殺したという男の息子浩一の骨髄移植のドナーとなる決心をする。

この作品では、複雑なエピソードをつなぎ合わせる蝶番のような役割を、いくつかの花が果たしているといえるだろう。

第3章 課題とその分析

採集する植物の分類カテゴリーをどこまでにするかは悩ましい問題である。種まで特定できるものに限定するのはかなり範囲を狭めることになり、それだけ受講生にとってのハードルが高くなる。筆者の経験上、種名、属名あたりまでが圧倒的多数派で、科名が問題になることは稀である。ただ、被子植物や裸子植物といった分類学上の用語が文学テキストに登場してくるケースはなかなかないにしても、シダ、コケといった門名が日常語として普通に使われる場合もある。シダやコケをよしとするなら針葉樹や広葉樹もしかりとなるはずだが、それなら雑木林はどうなのかとくる。雑木林が可なら、雑草はいかに、野原や草原はどうなると、際限がない。結局のところ、取捨選択は、種子植物の場合、種名が特定できることを大前提とするが、属名でも一つに特定できれば可という形で運用し、シダ、コケは例外的に認める対応をとったが、ダブルスタンダードの感は否めなかった³⁾。

改善するとすれば、最初に植物の分類法を解説したうえで、学名（二名式）表記が可能なものに限定することが、ひとつの案である。考え方としてシンプルであり、誤解や例外を生じにくい。いちいち植物図鑑で調べなくても、ウィキペディアを使って検索すれば、たちどころに学名がチェックできるという点も、受講生にとっては簡便である。

植物の装飾的な価値を重視する今回の採集方法に関しては、テキストをきちんと読んで文脈から判断するという教育的メリットも否定できない反面、植物と人間との関係の重要な側面を除外するというデメリットも看過できない。エディブル・フラワーの事例はなかったが、これなどは、食べ物としてよりはむしろ装飾的な価値の方に重点が置かれているものだろう。サラダにトマトを乗せるのは、栄養学的見地からのみのことではない。

生えているのかいないのか、生きているのか切り取られたものなのかという基準も、それほど明快ではない。生け花は明らかに装飾を目指したものであるし、比喩表現で用いられた場合、そもそも生死の範疇を越えている。

一方、材料として利用された植物を含めるとなると、煙草やパン、爪楊枝に木綿のハンカチなど、作者もことさらに植物と意識していないものが大量にピックアップされてくることになる。畳も餅も植物由来だという原料探しに走られる恐れもなくはない。その煩雑さを嫌って一律排除してみたものの、逆に、区別するが故のわずらわしさも生じてくる。スイカ割りのスイカははたして食べ物なのか否か、砂浜に置かれたスイカに装飾的な価値はあるのかないのか、といった悩みがどこまでも付きまとう。

原点に立ち返り受講生の側に立ってみると、どのような形であれ、見つけることの楽しさが、次に進む原動力となる。委細承知の上で、できるかぎりの限定を取り払うことも、取り組んでみる価値はあるかもしれない。

翻訳の問題についてはすでに触れたが、日本語独特の慣用表現に植物が含まれてくる場合もあり、原典至上主義の立場からは、これがノイズとなりうる。「信心深い」を「抹香臭い」と訳したり、「そっくり」を「瓜二つ」としたりするケースがこれに当たる。原文には植物の痕跡がないにもかかわらず、翻訳にはそれが現れてくる。今回の授業では日本文学も対象に含めたこともあって、原文との対照を要求しなかったが、レベルを上げてより充実した内容にするには、試してみたい課題ではある。

また、描かれる植物の作品上の意味合いを考察することが、文学を専門としない受講生にとって難易度の高い問題であることについても前述した。ただ、類型的な選択肢をあらかじめ提示したうえで、どれに当てはまるかを考えさせるのであれば、かなり取り組みやすくなるかもしれない。ただし、この場合も選択肢を工夫する必要がある、「描写された情景の一要素」といったあまりに当然すぎる項目を入れてしまうと、8割がた当てはまることになり、かえって思考停止を招く恐れもある。

むすびにかえて

以下は、2020年度春学期「世界の文学」の授業で採集された植物の一覧である。有川浩『植物図鑑』にかかわってすでに言及したように、文学作品の読者にとってなじみの薄い植物が多く登場するような作品については、写真入りの図鑑のような形でリストアップできれば、読者の便宜に供することにつながると思われる。実現は今後の課題としたい。

採集植物のリスト（書名の50音順）

- * 受講生の提出したものをベースに、筆者が独自に採集して付け足したのものも含まれる。
- ** それぞれのリストは作品中に登場する植物を網羅したものとはかぎらない。
- *** 馴染みの薄い植物名は、「<」印の後に、一般的な呼称を付した。
- **** 丸かっこ内の数字は登場するページを示す。同じ植物が同一作品内に複数回登場する場合は、代表的と思われる例の一つを選んである。特徴的な描写は*印の後に引用した。
- ***** 多くは受講生が使用した版をそのまま踏襲したが、筆者が確認する際の都合により、別の版にかえたものもいくつかある。

『赤い花』ガルシン（旺文社文庫 1968年）

むらさきはしどい<ライラック（12）、けしの一<種（16 *けしの一<種の、異常に強烈な真紅の花が、彼の注意をひきつけたのである）、榆（19）、きゅうり（20）、すいか（20）、メロン（20）、桜（20）、ダリア（20 *中央の小さな築山の上には、庭じゅうでいちばんき

れいな花壇がつくられていた。色鮮やかな花々が上の花壇を縁どってはえ、その中央には大きい、大輪の珍しい、赤いまだらのある黄色いダリアが美しく咲きみだれていた。この花は一段と高くそびえ立って、庭全体の中心をなして、多くの患者がこの花になにかしらない神秘的な意義を付していたことが見てとれた。新しい患者にもこの花はやはり、ふつうのものではなく、庭と建物のまもり本尊のように思われた)、バラ (21)、つくばね朝顔<ペチュニア (21)、タバコの茂み (21)、はっか (21)、こうおうそう<マリーゴールド (21)、のうぜんはれん<ナスタチウム (21)、あかざ (21)、

『アラジンと魔法のランプ』(ぎょうせい 1990 年)

バラ (88)、スミレ (88)、天人花 (88)、ニオイアラセイトウ (88)、アネモネ (88)、水仙 (88)、ラベンダー (88)

『エレンディラ』ガルシア＝マルケス (ちくま文庫 1983 年)

ヒマワリ (10)、海藻 (11)、バラ (22)、ジャスミン (66)、ガーデニア<クチナシ (89)、ビート (104)、サボテン (123)、オレンジの樹 (154)、パンジー (171)、月桂樹 (175)、アルストロメリア (179)

『オセロー』シェイクスピア (研究社 2008 年)

浮草⁴⁾ (21)、いらくさ (65)、レタス (65)、ヒソップ (65)、麝香草 (65)、莓 (183)、柳 (259)、鈴懸の木 (259)、薔薇 (279)

『帰れない山』パオロ・コニエッティ (新潮社 2018 年)

唐松 (120)、酢の木 (161)

『鏡の国のアリス』ルイス・キャロル (青土社 2019 年)

デイジー (135)、柳 (135)、オニユリ (135)、薔薇 (138)、スミレ (139)、ダリア (139)、飛燕草<デルフィニウム (142)

『火星に住むつもりかい』伊坂幸太郎 (光文社 2015 年)

キャベツ (122)

『悲しき熱帯』村上龍 (角川文庫 1984 年)

ブーゲンビリア (33), バナナ (33 * バナナの甘い匂いは地面全体から渦を巻いて立ち昇る, 亜熱帯の植物の呼吸は“遠い”感覚を与えてはくれないのだ), 桜 (33), 椰子 (45), 紅藻 (88), マングローブ (88), トマトの苗木 (124), 棕櫚 (152), マンゴー林 (156), 南洋桜<ジャマイカンチェリー (159), 竜舌欄 (181),

『ガリバー旅行記』 スウィフト (講談社 1995 年)

麦 (73), 林檎の木陰 (113), レモンの木陰 (113), チューリップ (168), 榎 (211)

『黄色いアイリス』 アガサ・クリスティー (早川書房 1980 年)

らっぱ水仙 (78), 早咲きのチューリップ (78), 青いヒヤシンス (78), 黄色いアイリス (141), カーネーション (149), バラ (149), アーモンド (160)

『記憶喪失の君と、君だけを忘れてしまった僕。』 小鳥井ほたる (スターツ出版文庫 2018 年)
桜 (232)

『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治 (集英社文庫 1990 年)

樺の花<カバザクラないしはヤマザクラ⁵⁾ (10 * 泡と一緒に, 白い樺の花びらが天井をたくさんすべってきました), やまなし (12), 桔梗の花びら (16), 銀杏 (17), 栗 (46), まゆみ (46 * みちが一むらの赤い実をつけたまゆみの木のそばまで来たとき両方の人たちは行きあいました), よもぎ (55), あざみ (66), ほおの花 (66), はんの木 (67), 楊 (67), 苹果 (72), 烏瓜 (148), いちい (148), ひのき (148), ケール (150), アスパラガス (150), ひば (155), プラタナス (156), ポプラ (157), 松 (160), 檜 (160), つりがねそう (160), 野ぎく (160), すすき (169), りんどうの花 (169), 野茨 (188), けやき (188), とうもろこし (201 * そしてちらっと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑色の大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらっと見えたのです。それはだんだん数を増してきてもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引っ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいその野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめん植えられていてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです), なでしこの花 (206), 唐檜 (211), もみの木 (211)

『草花たちの静かな誓い』宮本輝（集英社 2016 年）

桜 (5), デイゴ (14), 芝生 (32), ベチュニア (34), アイビーゼラニウム (34), プーゲンベリア (34), コスモス (34), パラ (34), ダリア (34), ベゴニア (34), バジル (37), ミント (37), ローズマリー (37), タイム (37), セージ (37), オレガノ (37), カーネーション (39), 蔓バラ (87), 蔦 (124), サボテン (264 *これか, サボテンの花とはと弦矢は歩道に立ち止まって眺めた。一見, 日本の芝桜のようだがサボテンの一種なのだ), 朝顔 (145), ミモザ (145), ハイビスカス (145), 蘭 (145 *十二種類の蘭が植木鉢に咲いている), 桔梗 (154 *桔梗の, 茎に近い箇所の膨らみにもそっと触れた。触れながら, きれいだ, うつくしい, と話しかけつづけた), ガーベラ (154 *濃いオレンジ色のガーベラの花弁に触れた), 牡丹 (157), ジャカラランダ (179 *ジャカラランダの花はさらに増えて, 巨木全体が薄紫の霞のように見えた), シュガーガム (191), ラベンダー (205), 苺 (205), ジャスミン (277 *自分の背丈ほどあるジャスミンの木には, 細かな白い花が無数に咲いていて, 芳香があたりに満ちていた), ヤシ (299), ユーカリ (308), ねむ (308), 楓 (356), ノウゼンカズラ (394)

『コインロッカーベイビーズ』村上龍（講談社文庫 1984 年）

*採集なし。

『こちら, 幸福安心委員会です。女王様と永遠に幸せな死刑囚』うたたP・鳥居羊（PHP 研究所 2013 年）

薔薇のような香り (52), サボテン (72), リンゴ (143)

『こちら, 幸福安心委員会です。女王様と世界線上カラミティ』うたたP・鳥居羊（PHP 研究所 2014 年）

桔梗 (18), アヤメ (19), 白の睡蓮 (40), 水金梅 (40 *青く澄んだ湖畔に, 様々な水草が生い茂っている。水面に浮かぶ睡蓮の葉と花, その周囲に顔をのぞかせている水金梅は, 色鮮やかで目立っていた), アサガオ (184), 鳳仙花 (184), 待宵草 (184)

『こちら, 幸福安心委員会です。女王様とハピネス・サマーゲーム』うたたP・鳥居羊（PHP 研究所 2014 年）

バナナ (95), 椰子の木 (113), スイカ (154), ヒマワリ (229)

『小人たちの黄金』ジェイムズ・スティーヴンズ（晶文社1983年）

ハシバミの樹（9）、松の木（19）、薔薇（32）、ヒース（40）、キイチゴ（40）、シダの茂み（48）、バターカップ＜キンポウゲ（76）、ひな菊（76）、苔（77）、ハリエニシダ（77）、イラクサ（78）、アザミ（78）、イチイ（88）

『サウスポイント』よしもとばなな（中央公論社2008年）

蓮（15）、杉の木（22）、椿の木（39）

『桜の園・三姉妹』チャーホフ（新潮文庫1967年）

桜の花（9）、虫とり草⁶⁾（20 *この部屋は、虫とり草のにおいがする）、ポプラ（39）、ケシ（87）、樅（207）、楓（207）、白樺（207）

『ジークル博士とハイド氏』スティーブンスン（光文社古典新訳文庫2009年）

*採集なし。

『少女ポリアンナ』エレナ・ポーター（角川文庫2013年）

松（45）、ナデシコ（96）、ラベンダー（196）、赤バラ（196）

『植物図鑑』有川浩（幻冬舎文庫2013年）

ヘクソカズラ（36 *「臭いがひどいのは相変わらずなんだけどさ。花の姿の愛らしさは『雑草』の中でもかなり上位に入ると思うよ。こんなに花がきれいなのにヘクソカズラはかわいそうだって思う人もたくさんいたんだろうな、別名もあるんだ。サオトメカズラにヤイトバナ。花の愛らしさや特徴を採ろうとした名前なんだろうね」）、カモミール（47）、フキ（63）、ツクシ（67）、菜の花（90）、セイヨウカラシナ（91）、ノビル（96）、タンポポ（118）、シロツメクサ（118）、アカツメクサ（118）、コメツブツメクサ（118）、オオイヌノフグリ（126）、レンゲ（128）、スミレ（131）、ハルジオン（132）、ヒメジョオン（132）、ナズナ（132）、ハコベ（132）、イヌガラシ（137）、スカシタゴボウ（137）、トリカブト（139）、ワラビ（158）、オニノゲシ（164）、イタドリ（164）、ユキノシタ（189）、クレソン（190）、ノイチゴ⁷⁾（235）、イヌビユ（254）、イノコズチ（254）、スベリヒユ（255）、ポーチュラカ（ハナスベリヒユ）（256）、アップルミント（マルバハッカ）（258）、スペアミント（258）、ヨモギ（283）、アカザ（286）、シロザ（286）、ハナミズキ（299）、ハゼラン（サンジソウ）（355 *つぼみは薄紅の仁丹だった。だから、咲いた花もごく小さい。しかし、遠目にも分かる鮮やかな

ピンク色の花だった。しべの明るい黄色がアクセントになっている。シンプルな五枚花弁の星形とその色合いが相まって、まるで量産したオモチャのようなかわいらしさだ)、ニワゼキショウ (388 *そのニワゼキショウの花は白かった。花心に濃い紫がかかっている)、ネジバナ (391 *すうっとまっすぐ天に伸びたしなやかな茎には、ピンクの小花が螺旋状についている。近くにもぼつぼつ同じ花が生えていて、それぞれ花の色合いが微妙に違う。花が白い株もあった。)

『旅路の果て』 コーディ (講談社 2000 年)

ヒナギク (4), スパイリア<シモツケ (59), パールプッシュ<ヤナギザクラ (59), スノードロップ (60), 芝生 (71), マツ (71), ナラ (71), フロックス (109 *これは春の奇跡の一つ。フロックスというの。二、三週間もたてば、花が薄紅色に咲き乱れるわ。いいかおりでいっぱいになるのよ), レンギョウ (118), スミレ (185), ラッパズイセン (200)

『夏の庭』 湯本香樹実 (徳間書店 2001 年)

菊の花 (15), キンモクセイ (24), キンセンカ (89), ユキオコシ<クレマチスの一種 (89), スイセン (90), スミレ (90), ダイコン (90), オシロイバナ (90), ナデシコ (90), ノギク (90), ヒガンバナ (90), アネモネ (90), カタクリ (90), ヤマブキソウ (90), ノボタン (90), キツネノカミソリ (90), キリンソウ (90), ツリガネソウ (90), コスモス (150 *あんなにひどい台風だったのに、コスモスはだめにならなかった。いったんぐにゃりと曲がった茎は、また真上を向いて伸びはじめている。緑色が濃くなったようにさえ見える), ヤマブドウ (160), コクワ (160), マタタビ (160), オンコの実 (160), キイチゴ (162 *ぼくたちはみんな、森の風を吸いこんで熟れたキイチゴの、甘くすっぱい実のひと粒に包まれているようだった。)

『ノルウェイの森』 村上春樹 (講談社 1987 年)

杉 (166)

『白蝶花』 宮木あや子 (新潮社 2008 年)

芍薬 (15), 天人菊<ガイラルディア (32), 春者菊 (32), 茉莉花<ジャスミンの一種 (48), 凌霄花<ノウゼンカズラ (62), 紫陽花 (80), 椿 (88), そらまめ (102), 桜 (112), 野紺菊 (145), 乙女椿 (232), メアリー・マグダレンという品種の薔薇 (232)

『ハックルベリー・フィンの冒険』 マーク・トウェイン (光文社古典新訳文庫 2014 年)
カブ (48), ヒッコリー (82), ツタ (100), ヤナギ (100), イグサ (106), イチゴ (117),
ラズベリー (118), ポプラ (179), トウモロコシ (183), スイカ (183), メロン (183),
クラブアップル (183), カキ (183), リンゴ (301), オレンジ (301), モモ (301), ブド
ウ (301), イトスギ (347), ヒマワリ (394), マンダラゲ<チョウセンアサガオ (394),
バラの花びら (415)

『はつ恋』 村山由佳 (ポプラ社 2018 年)

梅 (13), 万作 (13), 辛夷 (13), 雪柳 (13), 染井吉野 (13), 杏 (13), 水仙 (13), 勿忘草 (13),
桜 (19), 小手毬 (23), 大手毬 (23), 楓 (24), 烏野豌豆 (27), 草藤 (27), 春紫苑 (27),
嫁菜 (27), 薔薇 (28), アイリス (28), 浜茄子 (28), 紫陽花 (44 * 水色から薄紫に色
づいた紫陽花の花たちが, 上下にうなづくように揺れる), カサブランカ (52), 松 (58),
浜昼顔 (58 * 浜昼顔の花が震え, 恋人の髪が額にかかる。), ススキ (103), 野菊 (107),
桃 (163), 蓬 (164), 杉菜 (164), 蒲公英 (164), 三色堇 (164), 喇叭水仙 (164), チュー
リップ (164), ラナンキュラス (164), 菊 (164), 日本水仙 (164), ストック (164), 金
魚草 (164), 白粉花 (226), 鳳仙花 (226), 松葉菊 (226), 無花果 (235), 枇杷 (235)

『初恋』 ツルゲーネフ (岩波文庫 1960 年)

木苺 (11), 蕁麻 (いらくさ) (48), 樺の木 (48), 接骨木 (72), 紅ばら (73), 茴香<フェ
ンネル (83), 樅の木 (87)

『花言葉をさがして』 ヴァネッサ・ディフェンバー (ポプラ社 2011 年)

苔 (3), アザミ (7), カロライナジャスミン (8), インディアンジャスミン (8), マリーゴー
ールド (11), バジル (11), カーネーション (11), シャクヤク (11), バラ (12), ダリア (12),
ブドウの木々 (18), アロエ (25 * 海岸近くにアロエが群生して, 背の高い赤い花が空に
伸びている以外, 目新しいものはなにもなかった), ラベンダー (27), フェンネル (32),
マテリジャポピー<ロムニーア⁸⁾ (33), ワイルドゼラニウム<ゲラニウム・マクラツム⁹⁾
(34), アサガオ (34), トケイソウ (34), ヒナギク (36), ヒマワリ (36), チューリップ
(37), ヒース (37), ジギタリス (43), アジサイ (43), アネモネ (43)

『花の鎖』 湊かなえ (文芸春秋 2011 年)

トルコキキョウ (8), りんどう (8), バラ (9), ユリ (9), ヒマワリ (33), チューリップ (34),

コマクサ (34), ガーベラ (96), コスモス (80 *一輪挿しに薄紫のコスモスが飾られている),
トウヤクリンドウ (184), ハクサンイチゲ (261), シナノキンバイ (261), トリカブト (261),
クルマユリ (261)

『不思議の国のアリス』 ルイス・キャロル (青土社 2019 年)
デイジー (7), バラ (72), チューリップの根 (72)

『フラニーとゾーイー』 サリンジャー (新潮社 1976 年) (野崎孝訳)
金魚草 (77), おどろ (80), ぬるで (132), 楓 (166), 薔薇の花 (184)

『また、同じ夢を見ていた』 住野よる (双葉社 2016 年)
薔薇 (27), バオバブ (55), やしの木 (56), イチジク (56), オジギソウ (88), 菜の花 (257)

『モーリス』 フォースター (光文社古典新訳文庫 2018 年)
ヒナギク (38), ノイバラ (121), シダ (155), 待宵草 (196), 睡蓮 (317), 月桂樹 (395)

『山の麓の老人』 アジジ・ハジ・アブドゥラー (大同生命国際文化基金 2005 年)
マンゴー (19), 稲 (31), スンドウドウク¹⁰⁾ (98), クメメ¹⁰⁾ (99), プタイ<ネジレフサ
マメノキ (101), 竹 (104), ヤム芋 (112)

『ライオンと魔女』 C・S・ルイス (カラー版ナルニア国物語) (岩波書店 2005 年)
ヒイラギ (138), モミ (143), カシワ (143), プナ (143), ニレ (143), シラカバ (143),
マツユキソウ<スノードロップ (144), キンポウゲ (144), クロッカス (144 *わずか五分もたたないうちに, こんどは何十本かのクロッカスが, 一本の古い根元のまわりに, すくすくと出ているのに気がつきました。金と紫と白の花々です), サクラソウ (145), キングサリ<ゴールデンチェーン (145), カラマツ (145), ツリガネ水仙<ヒヤシンソイデス (146), スグリの花 (146 *そこを通り抜けると, スグリの花々がびっしりと咲くところ, さらにあまいかおりがむせぶようなサンザシのしげみに出ました), サンザシ (146)

『ライ麦畑でつかまえて』 サリンジャー (白水社 1984 年)
蘭の花 (86)

『羅生門・鼻・芋粥』芥川龍之介（角川文庫 1989 年）

松（5）、寒梅（6）、水仙（6）、冬椿（6）、刀柏¹¹⁾（9）、高野槇（9）、藪柑子（9）、
八つ手（9）、桜（12）、麦（22）、胡麻（31）、銀杏（47）、椽（47）、堇（52）、蓬の葉（76）、
柳（76）、櫛くハゼノキ（77）、枯薄（79）、野葡萄（80）

『ラブコメ』松久淳／田中渉（小学館 2004 年）

サンリッチオレンジ（3）、デルフィニウム（3）、菊（3）、トルコキキョウ（7）、アンス
リウム（7）、グラジオラス（12）、スイレン（12）、オオマツヨイグサ（12）、ストック
（12）、ユリ（63）、ガーベラ（63）、ラクスパー（63）、ストレッチア<ストレリチア（63）、ユー
チャリスリリー<ユーチャリス（119）、スプレーバラ（119）、イソトマ（119）、シザンサ
ス<コチョウソウ（171）、マリーゴールド（182）、キササゲ（186）、ノウゼンカズラ（186）、
バラ（199）、コスモス（227）、アルストロメリア（234）、スイートピー（234）、ダイヤモンド
ドリリー<ネリネ（340）、スマレ草（359）、ジャスミン（365）、イベリス（367）、ニゲ
ラ（367）

『林檎の木』ゴールズワージー（集英社文庫 1994 年）

松（9）、落葉松（9）、榲（9）、金色のハリエニシダ（9）、リンボク¹²⁾（10）、サンザシ（12）、
羊歯（12）、青い小さな姫萩（14）、赤松<ヨーロッパアカマツ、スコッチパイン（22）、
イチイ（23）、スグリ¹³⁾（23）、林檎（25 * 果樹園の一番低いところにあるその大きな林
檎の木は、淀みのすぐそばに生えていたので、その大枝はほとんど水面に覆いかぶさって
いると言ってもよかった。若葉が出ていて、今にも花が咲きはじめるばかりになり——深
紅色の蕾がまさにほころびかけているところだった。64 * また窓からは、薔薇色と白の
キルティング布団のように、林檎の花が果樹園一面を埋めつくしているのを見ることがで
きた）、アラセイトウ（34）、カーネーション（34）、堇（51）、蕨（51）、木苺（51）、とね
りこ（57）、オーク（75 * そうだ、たしかにジムじいさんの言ったとおり、オークがとね
りこよりも先に葉を出して茶色がかった金色に輝いている）、ブルーベル<イングリッシュ
ブルーベル（76 * そのあたりは、一面に咲き乱れているブルーベルで煙っているように
見え、二十本ばかりの野生林檎の木が、今を盛りと咲き誇っていた）、野生林檎<クラブ
アップル（76）、キンボウゲ（76 * 彼は草の上に体を伸ばして横になった。一面に咲き乱
れたキンボウゲと、金色をしたオークに飾られた野原の美しさから、灰色の岩山の下に漂
う、この世のものとも思えない美しさへの変化は、アシャーストの心を、一種の驚異の思
いで満たすのだった）、ライラック（115 * 星は青みを帯びた黒い夜空に輝き、その光を

受けて何本かのライラックが、夜の花の名状し難い神秘的な色を示していた)、石竹¹⁴⁾(135)、矢車菊(135)、薔薇(135)、ラベンダー(135)、車前草¹⁵⁾(138)、酸模(145)、いらくさ(145)

『檸檬・城のある町にて』梶井基次郎(角川文庫1989年)

向日葵(6)、カンナ(6)、芭蕉(15)、糸杉(15)、松(15)、桜(16)、梅(38)、南瓜(38)、紫蘇(38)、椿(38)、楓(41 *冷たい楓の肌を見ていると、ひぜんのようについている苔の模様が美しく見えた)、銀杏(42)、櫟(48)、麦(48)、鈴懸(49 *青空が広く、葉は落ち尽くし、鈴懸が木に褐色の実を乾かした)、檜葉(51)、山茶花(76)、やつで(76)、枇杷(82)、橙(82)、檜(84)、ダリヤ(216)、薔薇(216)、枯萱(217)、杉(217)、蕨(217)、露の臺(217)、自然薯(217)、檜(218)、山葵(218)、櫻(218)

『ロボット・イン・ザ・ガーデン』デボラ・インストール(小学館2016年)

芝(7)、柳(11)、バラ(48)、サボテン(101)、回転草<タンブルウィード(101)、オリヅラン(156)、桜(216)

『ロミオとジュリエット』シェイクスピア(研究社、2007年) *大場建治編注訳

鈴懸の木(19)、おおばこの葉(37)、ニガヨモギ(43)、はしばみの実(59)、枇杷の木(83)、薔薇(89)、ローズマリー(133)、柘榴の木(195)、櫟の木立(269)

『吾輩は猫である』夏目漱石(岩波文庫1990年)

茶の木(15)、枯菊(15)、杉(16)、梧桐<アオギリ(16)、山茶花(23)、水仙(49)、葉蘭(60)、松(68)、玉椿(203)、無花果(317)、自然薯(324)、檜(326)

注

- 1) 次善の策と言いうるかどうか定かではないが、ある程度有名な作品に限定して、例えば『フランス文学植物図鑑』のたぐいを国別もしくは地域別、時代別で編むことができれば、重宝してくれる文学愛好家もいないわけではないだろう。コレットのような花好きの作家であれば、『コレット花図鑑』も可能である。ただ、一番の障害は写真だ。外国の文学には日本に咲かない花も描かれる。自分で撮るとなればハードルはおのずと高くならざるを得ない。手始めに試作するなら北海道の文学に的を絞る方が適当かもしれない。
- 2) 筆者が担当する別の科目「フランス文学概論」との重複を避けるため、フランス文学はあらかじめ除いてある。
- 3) なおかつ、マングローブやタンブルウィードなど、ケースバイケースで認めたものがある。
- 4) 翻訳では「浮草のように諸国をさ迷う異邦人に捧げてしまったのですから」と「浮草のように」を補って訳してあるが、原文(In an extravagant and wheeling stranger / Of here and everywhere)に

「浮草」は出てこない。

- 5) 集英社文庫の注にしたがう。
- 6) 除虫菊（シロバナムシヨケギク）のことだろうか。
- 7) 各章のタイトルには植物名と学名が用いられていて、第7章は「ノイチゴ *Rubus hirsutus*」となっている。ノイチゴは、通常バラ科の草本で、苺状の実をつける野生種（ヘビイチゴなど）を指すが、*Rubus hirsutus* は木本であり、クサイチゴと呼ばれる。
- 8) *Romneya* 属はカリフォルニア南部に多く自生する。ケシ科。
- 9) ゲラニウム的一种で *Geranium maculatum* を指す。
- 10) 文脈によると薬草の名前らしいが、学名は不明。
- 11) マキ科ナギ属ナギ (*Nageia nagi*) を指すものと思われる。
- 12) 原文は blackthorn なのでスピノサスモモ (*Prunus spinosa*) が正しい訳。リンボク (*Prunus spinulosa*) は別種。
- 13) 原文は flowering-currant (*Ribes sanguineum*) なのでハナスグリ。
- 14) 原文は pink で、おもにタツタナデシコ (*Dianthus plumarius*) を指す。石竹 (*Dianthus chinensis*) (英名 China pink) は別種。
- 15) 原文は woodruff で、匂い袋に詰めてあるところから、woodruff (クルマバソウ) の地方名かなにかではないだろうか。

参考文献

- John Galsworthy, *The apple tree and other tales*, Charles Scribner's Sons, New York, 1946.
- 芥川龍之介『羅生門・鼻・芋粥』角川文庫 1989 年
- アジジ・ハジ・アブドゥラー『山の麓の老人』大同生命国際文化基金 2005 年
- 有川浩『植物図鑑』幻冬舎文庫 2013 年
- 伊坂幸太郎『火星に住むつもりかい』光文社 2015 年
- うたたP・鳥居羊『こちら、幸福安心委員会です。女王様と永遠に幸せな死刑囚』PHP 研究所 2013 年
- 『こちら、幸福安心委員会です。女王様と世界線上カラミティ』PHP 研究所 2014 年
- 『こちら、幸福安心委員会です。女王様とハピネス・サマーゲーム』PHP 研究所 2014 年
- デボラ・インストール『ロボット・イン・ザ・ガーデン』小学館 2016 年
- 大場健治編注訳『オセロー』（シェイクスピア選集 10）研究社 2008 年
- 大場健治編注訳『ロミオとジュリエット』（シェイクスピア選集 5）研究社 2007 年
- 梶井基次郎『檸檬・城のある町にて』角川文庫 1989 年
- 門田裕一監修『山に咲く花 増補改訂新版』（山溪ハンディ図鑑 2）山と溪谷社 2013 年
- ガルシア＝マルケス『エレンディラ』ちくま文庫 1983 年
- ガルシン『赤い花』旺文社文庫 1968 年
- ルイス・キャロル『不思議の国のアリス 鏡の国のアリス』青土社 2019 年
- アガサ・クリステイー『黄色いアイリス』早川書房 1980 年
- 小鳥井ほたる『記憶喪失の君と、君だけを忘れてしまった僕。』スターツ出版文庫 2018 年
- メアリー・フランシス・コーディ『旅路の果て』講談社 2000 年
- パオロ・コニエッティ『帰れない山』新潮社 2018 年
- ゴールズワージー『林檎の木』集英社文庫 1994 年
- サリンジャー『フラニーとゾーイー』新潮社 1976 年（野崎孝訳）
- 『ライ麦畑でつかまえて』白水社 1984 年
- スウィフト『ガリバー旅行記』講談社 1995 年

- ジェイムズ・スティーヴンズ『小人たちの黄金』晶文社 1983 年
住野よる『また、同じ夢を見ていた』双葉社 2016 年
高橋秀男・勝山輝男監修『樹に咲く花 離弁花 1』(山溪ハンディ図鑑 3) 山と溪谷社 2000 年
『樹に咲く花 離弁花 2』(山溪ハンディ図鑑 4) 山と溪谷社 2000 年
『樹に咲く花 合弁花・単子葉・裸子植物』(山溪ハンディ図鑑 5) 山と溪谷社 2001 年
チャーホフ『桜の園・三姉妹』新潮文庫 1967 年
塚本洋太郎他『園芸植物大事典』(全 3 巻) 小学館 1994 年
ツルゲーネフ『初恋』岩波文庫 1960 年
ヴァネッサ・ディフェンバー『花言葉をさがして』ポプラ社 2011 年
マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』光文社古典新訳文庫 2014 年
夏目漱石『吾輩は猫である』岩波文庫 1990 年
デニ・バウン『ハーブ大百科』誠文堂新光社 1997 年
林弥栄・門田裕一監修『野に咲く花 増補改訂新版』(山溪ハンディ図鑑 1) 山と溪谷社 2013 年
林弥栄・古里和夫『原色世界植物図鑑』北隆館 1986 年
フォースター『モーリス』光文社古典新訳文庫 1971 年
エレナ・ポーター『少女ボリアンナ』角川文庫 2013 年
松久淳／田中渉『ラブコメ』小学館 2004 年
湊かなえ『花の鎖』文芸春秋 2011 年
宮木あや子『白蝶花』新潮社 2008 年
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』集英社文庫 1990 年
宮本輝『草花たちの静かな誓い』集英社 2016 年
村上春樹『ノルウェイの森』講談社 1987 年
村上龍『悲しき熱帯』角川文庫 1984 年
村山由佳『はつ恋』ポプラ社 2018 年
湯本香樹実『夏の庭』徳間書店 2001 年
よしもとばなな『サウスポイント』中央公論社 2008 年
C・S・ルイス『ライオンと魔女』(カラー版ナルニア国物語) (岩波書店 2005 年)